

「正直に言えば」

バゼットは迷い、意を決して、

「貴方と一緒にいけないから、拗ねています」

顔が赤くなっているのが自分でも恥ずかしかった。言峰の手が止まり、その顔が冷たい笑みを浮かべる。

「馬鹿馬鹿しいことを言うな」

刺されるような痛みが走る。子供じみた甘えが否定されるのも、言峰がそうやって愉しむのもわかっていたのに、実際に厳しい態度をとられると我慢できない。思わずバゼットはシーツを頭からかぶった。いつも湧きあがってくるはずの陶酔も、なぜか今は遠かった。

それでなくとも、いやな予感がする。根拠はないが心の底にある鬱積をどうにも拭いきれない。言峰と共に進めなことが嫌で仕方なく、そのせいでつい後ろ向きになっているのかもしれない。

言峰の足音が近づいてきてシーツをめくられる。まぶしい朝日の中に、いつもの真剣なまなざしがあった。

「安心しろ。おまえの心配が杞憂に過ぎんから馬鹿馬鹿しいと表現したまでだ」

「杞憂とは、どういうことですか」

「そのうちに解る」

言峰がしゃがみこみ、頭に手を置いてくれる。目覚めの時に感じた暖かな感触が、理屈のない安心感を呼び覚ましてくれた。見慣れた漆黒の瞳は朝日に照らされても色を失うことなく、揺るぎない意志を秘めている。

「それよりも気を抜かないことだ。今は現在の仕事のことだけを考えればいい。何が起きるかわからないのは、私がいてもいなくても一緒だ」

ねじられていた心が言峰の体温に氷解していく。言峰がそう言うのなら、意識の隅に影を落とす不安を見なくてもいいのかもしれない。

「いい加減に起きろ。先に行くが、せいぜい時間かせぎをしておく」

もういちどこちらの髪をかきまわし、言峰が立ちあがった。黒衣に包まれた身体はすでに慈悲のない厳しさをたたえている。その姿に、バゼットは尊え立っていた大聖堂を思い出した。天を刺す尖塔の鋭さ、世界を睥睨していた建物物の重々しさ。

部屋を出て行きかけたところで言峰はふりかえり、薄い笑みを見せた。